

Botchan Chapter 4 (Natsume Sōseki)

学校には宿直があって、職員が代る代るこれをつとめる。但し狸と赤シャツは例外である。何でこの兩人が当然の義務を免かれるのかと聞いてみたら、奏任待遇だからと云う。面白くもない。月給はたくさんとる、時間は少ない、それで宿直を逃がれるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それが当たり前だというような顔をしている。よくまああんなにずうずうしく出来るものだ。これについては大分不平であるが、山嵐の説によると、いくら一人で不平を並べたって通るものじゃないそうだ。一人だって二人だって正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は **might is right** という英語を引いて説諭を加えたが、何だか要領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う意味だそうだ。強者の権利ぐらいたら昔から知っている。今さら山嵐から講釈をきかなくってもいい。強者の権利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論としてこの宿直がいよいよおれの番に廻って来た。一体疝性だから夜具蒲団などは自分のものへ楽に寝ないと寝たような心持がしない。小供の時から、友達のうちへ泊った事はほとんどないらいだ。友達のうちでさえ厭なら学校の宿直はなおさら厭だ。厭だけれども、これが四十円のうちへ籠っているなら仕方がない。我慢して勤めてやろう。

教師も生徒も帰ってしまったあとで、一人ぼかんとしているのは随分間が抜けたものだ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちょっとはいつてみたが、西日をまともに受けて、苦しくて居たたまれない。田舎だけあって秋がきても、気長に暑いもんだ。生徒の賄を取りよせて晩飯を済ましたが、まずいには恐れ入った。よくあんなものを食って、あれだけに暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片付けてしまうんだから豪傑に違いない。飯は食ったが、まだ日が暮れないから寝る訳に行かない。ちょっと温泉に行きたくなった。宿直をして、外へ出るのはいい事だか、悪い事だかしらないが、こうつくねんとして重禁錮同様な憂目に逢うのは我慢の出来るもんじゃない。始めて学校へ来た時当直の人とは聞いたら、ちょっと用達に出たと小使が答えたのを妙だと思っただが、自分に番が廻ってみると思い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちょっと出てくると云ったら、何かご用ですかと聞くから、用じゃない、温泉へはいるんだと答えて、さっさと出掛けた。赤手拭は宿へ忘れて来たのが残念だが今日は先方で借りるとしよう。

それからかなりゆるりと、出たりはいたりして、ようやく日暮方になったから、汽車へ乗って古町の停車場まで来て下りた。学校まではこれから四丁だ。訳はないとあるき出すと、向うから狸が来た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやってきたが、擦れ違った時おれの顔を見たから、ちょっと挨拶をした。すると狸はあなたは今日は宿直ではなかったですかねえと真面目くさって聞いた。なかったですかねえもないもんだ。二時間前おれに向って今夜は初めての宿直ですね。ご苦労さま。と礼を云ったじゃないか。校長なんかになるといやに曲りくねった言葉を使うもんだ。おれは腹が立ったから、ええ宿直です。宿直ですから、これから帰って泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済ましてあるき出した。堅町の四つ角までくると今度は山嵐に出っ喰わした。どうも狭い所だ。出てあるきさえすれば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じゃないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答えたら、「宿直が無暗に出てあるくなんて、不都合じゃないか」と云った。「ちっとも不都合なもんか、出てあるかない方が不都合だ」と威張ってみせた。「君のざぼらにも困るな、校長か教頭に出逢うと面倒だぜ」と山嵐に似合わない事を云うから「校長にはたった今逢った。暑い時には散歩でもしないと宿直も骨でしょうと校長が、おれの散歩をほめたよ」と云って、面倒臭いから、さっさと学校へ帰って来た。

それから日はすぐくれる。くれてから二時間ばかりは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽きたから、寝られないまでも床へはいろいろと思つて、寝巻に着換えて、蚊帳を捲くつて、赤い毛布を跳ねのけて、とんと尻持を突いて、仰向けになった。おれが寝るときにとんと尻持をつくのは小供の時から癖だ。わるい癖だと云って小川町の下宿に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどんどん音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。下宿の建築が粗末なんだ。掛ケ合うなら下宿へ掛ケ合えと凹ましてやった。この宿直部屋は二階じゃないから、いくら、どしんと倒れても構わない。なるべく勢よく倒れないと寝たような心持ちがしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。ざらざらして蚤のようでもないからこいつあと驚ろいて、足を二三度毛布の中で振ってみた。するとざらざらと当ったものが、急に殖え出して脛が五六カ所、股が二三カ所、尻の下でぐちゃりと踏み潰したのが一つ、臍の所まで飛び上がったのが一つ——いよいよ驚ろいた。早速起き上つて、毛布をぱつと後ろへ抛ると、蒲団の中から、バツタが五六十飛び出した。正体の知れない時は多少気味が悪るかったが、バツタと相場が極ま

つてみたら急に腹が立った。バッタの癖に人を驚ろかしやがって、どうするか見ろと、いきなり括り枕を取って、二三度擲きつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛げつける割に利目がない。仕方がないから、また布団の上へ坐って、煤掃の時に藁を丸めて畳を叩くように、そこら近辺を無暗にたたいた。バッタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩だの、頭だの鼻の先だのへくっ付いたり、ぶつかったりする。顔へ付いた奴は枕で叩く訳に行かないから、手で攫んで、一生懸命に擲きつける。忌々しい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動くだけで少しも手筈がない。バッタは擲きつけられたまま蚊帳へつらまっている。死にもどうもしない。ようやくの事に三十分ばかりでバッタは退治た。箒を持って来てバッタの死骸を掃き出した。小使が来て何ですかと云うから、何ですかもあるもんか、バッタを床の中に飼っとく奴がどこの国にある。間拔め。と叱ったら、私は存じませんと弁解をした。存じませんで済むかと箒を椽側へ抛り出したら、小使は恐る恐る箒を担いで帰って行った。

おれは早速寄宿生を三人ばかり総代に呼び出した。すると六人出て来た。六人だろうが十人だろうが構うものか。寝巻のまま腕まくりをして談判を始めた。

「なんでバッタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バッタた何ぞな」と真先の一人がいった。やに落ち付いていやがる。この学校じゃ校長ばかりじゃない、生徒まで曲りくねった言葉を使うんだらう。

「バッタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と云ったが、生憎掃き出してしまっ一匹も居ない。また小使を呼んで、「さっきのバッタを持ってこい」と云ったら、「もう掃溜へ棄ててしまいました、拾って参りましょうか」と聞いた。「うんすぐ拾って来い」と云うと小使は急いで馳け出したが、やがて半紙の上へ十匹ばかり載せて来て「どうもお気の毒ですが、生憎夜でこれだけしか見当りません。あしたになりましたらもっと拾って参ります」と云う。小使まで馬鹿だ。おれはバッタの一つを生徒に見せて「バッタたこれだ、大きなずう体をして、バッタを知らないた、何の事だ」と云うと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。「籠棒め、イナゴもバッタも同じもんだ。第一先生を捕まえてなもした何だ。菜飯は田楽の時より外に食うもんじゃな

い」とあべこべに遣り込めてやったら「なもしと菜飯とは違うぞな、もし」と云った。いつまで行ってもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバッタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バッタを入れてくれたの頼んだ」

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温い所が好きじゃけれ、大方一人でおはいりたのじゃある」

「馬鹿あ云え。バッタが一人でおはいりになるなんて——バッタにおはいりになられてたまるもんか。——さあなぜこんないたずらをしたか、云え」

「云えてて、入れんものを説明しようがないがな」

けちな奴等だ。自分で自分のした事が云えないくらいなら、てんでしないがいい。証拠さえ挙がらなければ、しらを切るつもりで図太く構えていやがる。おれだって中学に居た時分は少しはいたずらもしたもんだ。しかしだれがしたと聞かれた時に、尻込みをするような卑怯な事はただの一度もなかった。したものはしたので、しないものはしないに極ってる。おれなんぞは、いくら、いたずらをしたって潔白なものだ。嘘を吐いて罰を逃げるくらいなら、始めからいたずらなんかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰があるからいたずらも心持ちよく出来る。いたずらだけで罰はご免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると思ってるんだ。金は借りるが、返す事はご免だと云う連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全体中学校へ何しにはいってるんだ。学校へは行って、嘘を吐いて、ごまかして、陰でこせこせ生意気な悪いたずらをして、そうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと癩違いをしていやがる。話せない雑兵だ。

おれはこんな腐った了見の奴等と談判するのは胸糞が悪るいから、「そんなに云われなきや、聞かなくていい。中学校へは行って、上品も下品も区別が出来ないのは気の毒なものだ」と云って六人を逐つ放してやった。おれは言葉や様子こそあまり上品じゃないが、心はこいつらよりも遥かに上品なつもりだ。六人は悠々と引き揚げた。上部だけは教師のおれ

よりよっぽどえらく見える。実^{じつ}落^おち付^ついているだけな悪^{わる}い。おれには到底^{とうてい}これほどの度^{どきょう}胸^{むね}はない。

それからまた床^{とこ}へはいつて横^{よこ}になったら、さっきの騒^{そう}動^{どう}で蚊^か帳^やの中^{なか}はぶんぶん唸^{うな}っている。手^て燭^{しよく}をつけて一^い匹^{びき}ずつ焼^やくなんて面^{めん}倒^{とう}な事^{こと}は出来^{でき}ないから、釣^{つり}手^てをはずして、長^{なが}く畳^{たた}んでおいて部^へ屋^やの中^{なか}で横^{よこ}縦^{たて}十^{じゅう}字^じに振^ふったら、環^{かん}が飛^とんで手^ての甲^{こう}をいやというほど撲^ぶった。三^{さん}度^{どめ}目に床^{とこ}へはいつた時^{とき}は少^{しょう}々^{じょう}落^おち付^ついたがなかなかな寝^ねられない。時^{とけい}計^{けい}を見^みると十^{じゅう}時^じ半^{はん}だ。考^{かんが}えてみると厄^{やっ}介^{かい}な所^{ところ}へ来^きたもんだ。一^い体^{たい}中^{ちゅう}学^{がく}の先^{せん}生^{せい}なんて、ど^いこへ行^いっても、こんなもの^{もの}を相^あ手^てにするなら気^きの毒^{どく}なものだ。よく先^し生^なが品^し切^なれにならない。よっぽど辛^{しん}防^{ぼう}強^{じょう}い朴^{ぼく}念^{ねん}仁^{じん}がなるんだろう。おれには到底^{とうてい}やり切^きれない。それを思^{おも}うと清^{きよ}なんてのは見^み上げたもの^{もの}だ。教^{きょう}育^{いく}もな身分^{みぶん}もない婆^{ばあ}さんだが、人^{にん}間^{げん}としてはすこぶる尊^{たつ}とい。今^{いま}まではあんなに世^せ話^わになつて別^{べつ}段^{だん}難^{あり}有^がいとも思^{おも}わなかったが、こ^ひうして、一^{ひとり}人^{にん}で遠^{えん}国^{こく}へ来^きてみると、始^{はじ}めてあ^あの親^{しん}切^{せつ}がわかる。越^え後^ごの笹^さ餡^{あん}が食^くいたければ、わ^わざわ^ざ越^こ後^ごまで買^かいに行^いって食^くわしてや^やっても、食^くわ^くせるだけの価^か値^ちは充^{じゅう}分^{ぶん}ある。清^{きよ}はおれ^{おれ}の事^{こと}を欲^{よく}がなくって、真^ま直^{ちき}な気^き性^{せう}だと云^いって、ほめ^ほめるが、ほめ^ほめられるおれ^{おれ}よりも、ほめ^ほめる本^{ほん}人^{にん}の方^{ほう}が立^り派^{っぱ}な人^{にん}間^{げん}だ。何^{なん}だか清^{きよ}に逢^あいたくなつた。

清^{きよ}の事^{こと}を考^{かんが}えながら、のつそつしていると、突^{とつ}然^{ぜん}おれ^{おれ}の頭^{あたま}の上^{うへ}で、数^{かず}で云^いったら三^{さん}四^し十^{じゅう}人^{にん}もあろうか、二^に階^{かい}が落^おっこちるほどどん、どん、どんと拍^{ひょう}子^しを取^とって床^{ゆか}板^{いた}を踏^ふみならす音^{おと}がした。す^すると足^{あし}音^{おと}に比^ひ例^{れい}した大^おきな関^との声^{こゑ}が起^{おこ}った。おれは何^{なに}事^{ごと}も持^もち上^あがったのかと驚^{おど}ろいて飛^とび起^おきた。飛^とび起^おきる途^と端^{たん}に、ははあさ^いさ^いの意^い趣^{しゆ}返^{がえ}しに生^{せい}徒^とがあ^あばれるのだなと気^きがついた。手^て前^{まえ}のわ^わるい事^{こと}は悪^いかったと言^いってしま^しわないうち^{うち}は罪^{つみ}は消^きえないもんだ。わ^わるい事^{こと}は、手^て前^{まえ}達^{たち}に覚^{おぼ}えがある^あらう。本^{ほん}来^{らい}なら寝^ねてから後^{こう}悔^{かい}してあ^あしたの朝^{あさ}でもあやまりに來^くるのが本^{ほん}筋^{すじ}だ。たとい、あやまらないまでも恐^{おそ}れ入^いって、静^{せい}肅^{しよく}に寝^ねているべきだ。それを何^{なん}だこの騒^{さわ}ぎは。寄^き宿^{しゆく}舎^{しゃ}を建^たてて豚^{ぶた}でも飼^かっておきあ^あしまし。気^{きち}狂^がいじ^まみ^また真^ま似^ねも大^{たい}抵^{たい}にする^いが^いいい。どうする^みか見^みろと、寝^ね巻^{まき}のまま宿^{しゆく}直^{ちよく}部^べ屋^やを飛^とび出^だして、櫛^{はし}子^ご段^{だん}を三^{さん}股^{また}半^{はん}に二^に階^{かい}まで躍^{おど}り上^あがった。す^すると不^ふ思^し議^ぎな事^{こと}に、今^{いま}まで頭^{あたま}の上^{うへ}で、た^たしかにど^どた^たば^ばた暴^あれてい^いたのが、急^{きゅう}に静^{しず}まり返^{かえ}って、人^{ひと}声^{こゑ}どころか足^{あし}音^{おと}もしなくな^なった。これ^{こゝろ}は妙^{みょう}だ。ラン^{らん}プはす^すでに消^けしてあるから、暗^{くら}くてど^どこに何^{なに}が居^いるか判^{はん}然^{ぜん}と分^{わか}らないが、人^{ひと}気^けのある^あるとないとは^いは^いは^いし^しよう^{よう}すでも知^しれる。長^{なが}く東^{ひがし}から西^{にし}へ貫^{つらぬ}いた廊^{ろう}下^かには鼠^{ねずみ}一^{いっ}匹^{びき}も隠^{かく}れていない。廊^{ろう}下^かのはずれ

つき はる むこ きわ あか へん こども とき ゆめ み
から月がさして、遥か向うが際どく明るい。どうも変だ、おれは小供の時から、よく夢を見
くせ むちゅう は お ねごと ひと わら
る癖があって、夢中に跳ね起きて、わからぬ寝言を云って、人に笑われた事がよくある。
じゅうろくしち ひろ ばん た あ
十六七の時ダイヤモンドを拾った夢を見た晩なぞは、むくりと立ち上がって、そばに居た兄
いま ひじょう いきおい たず みっか
に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねたくらいだ。その時は三日ばかりう
じゅう わら ぐさ おお よわ
ち中の笑い草になって大いに弱った。ことによると今のも夢かも知れない。しかししたしかに
ちが まんなか かんが こ
あばれたに違いないがと、廊下の真中で考え込んでいると、月のさしている向うのはずれ
いちにさん こえ ひび おも ま まえ
で、一二三わあと、三四十人の声がかたまって響いたかと思う間もなく、前のように拍子を取
いちどう
って、一同が床板を踏み鳴らした。それ見ろ夢じゃないやっぱり事実だ。静かにしろ、夜なか
ま こえ だ か しずか
だぞ、とこっちも負けんくらいな声を出して、廊下を向うへ駆けだした。おれの通る路は暗
めじるし にけん き
い、ただはずれに見える月あかりが目標だ。おれが駆け出して二間も来たかと思うと、廊下の
かた おお むこうずね いた あいだ からだ まえ
真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ痛いが頭へひびく間に、身体はすとんと前
ほう だ ちきしょう お あ き
へ抛り出された。こん畜生と起き上がって見たが、駆けられない。気はせくが、足だけは云
き いっほんあし
う事を利かない。じれったいから、一本足で飛んで来たら、もう足音も人声も静まり返って、
しん にんげん ひきょう で き
森としている。いくら人間が卑怯だって、こんなに卑怯に出来るものじゃない。まるで豚
かく やつ ひ だ こころ
だ。こうなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまらせてやるまではひかないぞと、心
き しんしつ ひと あ なか けんさ じょう
を極めて寢室の一つを開けて中を検査しようと思ったが開かない。錠をかけてあるのか、
つくえ なに つ た か お け こんど むこ あわ
机か何か積んで立て懸けてあるのか、押しても、押しても決して開かない。今度は向う合せ
きたがわ へや こころ どうぜん
の北側の室を試みた。開かない事はやっぱり同然である。おれが戸を開けて中に居る奴を引
つ いらっ ひがし あしびょうし はじ
っ捕らまえてやろうと、焦慮すると、また東のはずれで関の声と足拍子が始まった。この
やるうもう あわ とうざいあいおう ば か き
野郎申し合せて、東西相応じておれを馬鹿にする気だな、とは思ったがさてどうしていいか
しょうじき はくじょう ゆうき わりあい ちえ た
分らない。正直に白状してしまうが、おれは勇気のある割合に智慧が足りない。こんな時
にはどうしていいかさっぱりわからない。わからないけれども、決して負けるつもりはない。
す かお えど こ いくじ ざんねん
このままに済ましてはおれの顔にかかわる。江戸っ子は意気地がないと云われるのは残念だ。
はなつた こぞう て しかた な ねい
宿直をして鼻垂れ小僧にからかわれて、手のつけようがなくって、仕方がないから泣き寝入り
いっしょう なお もと はたもと せいわけんじ ただ
にしたと思われちゃ一生の名折れだ。これでも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の
まんじゅう こうえい どびやくしょう う ちが お
満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生まれからして違うんだ。ただ智慧のないところが惜し
こま
いだけだ。どうしていいか分らないのが困るだけだ。困ったって負けるものか。正直だから、
よ なか ほか かんが
どうしていいか分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考えて
こんやじゅう
みる。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさって勝つ。あさって勝

てなければ、下宿から弁当を取り寄せて勝つまでここに居る。おれはこう決心をしたから、廊下の真中へあぐらをかいて夜のあけるのを待っていた。蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかった。さっき、ぶつけた向脛を撫でてみると、何だかぬらぬらする。血が出るんだろう。血なんか出たければ勝手に出るがいい。そのうち最前からの疲れが出て、ついうとうと寝てしまった。何だか騒がしいので、眼が覚めた時はえっ糞しまったと飛び上がった。おれの坐っていたみぎがわ右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立っている。おれは正気に返って、はっと思う途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引っ攪んで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向に倒れた。ざまを見ろ。残る一人がちょっと狼狽したところを、飛びかかって、肩をおさへ抑えて二三度こづき廻したら、あっけに取られて、眼をぱちぱちさせた。さあおれの部屋まで来いと引っ立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾いて来た。夜はどうにあけている。

おれが宿直部屋へ連れてきた奴を詰問し始めると、豚は、打つても擲いても豚だから、ただ知らんがなで、どこまでも通す了見と見えて、けっして白状しない。そのうち一人来る、二人来る、だんだん二階から宿直部屋へ集まってくる。見るとみんな眠そうに瞼をはらしている。けちな奴等だ。一晩ぐらい寝ないで、そんな面をして男と云われるか。面でも洗って議論に来いと云ってやったが、誰も面を洗いに行かない。

おれは五十人あまりを相手に約一時間ばかり押問答をしていると、ひょっくり狸がやって来た。あとから聞いたら、小使が学校に騒動がありますって、わざわざ知らせに行っただけそう。これしきの事に、校長を呼ぶなんて意気地がなさ過ぎる。それだから中学校の小使なんぞをしてるんだ。

校長はひと通りおれの説明を聞いた。生徒の言草もちよつと聞いた。追って処分するまでは、今まで通り学校へ出る。早く顔を洗って、朝飯を食わないと時間に間に合わないから、早くしろと云って寄宿生をみんな放免した。手温るい事だ。おれなら即席に寄宿生をことごとく退校してしまふ。こんな悠長な事をするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。その上おれに向って、あなたもさぞご心配でお疲れでしょう、今日はお授業に及ばんと云うから、おれはこう答えた。「いえ、ちつとも心配じゃありません。こんな事が毎晩あつても、命のある間は心配にやなりません。授業はやります、一晩ぐらい寝なくて、授業が出来ないくらいなら、頂戴した月給を学校の方へ割戻します」校長は何と思ったのか、し

ばらくおれの顔かおを見つめていたが、しかし顔だいぶが大分はれていますよと注意ちゅういした。なるほど何なんだか少々しょうしょうおも重たいき気がする。その上べた一面いちめんかゆ痒い。蚊かがよっぽと刺さしたに相違そういない。おれは顔かおじゅう中かぼりぼり搔きながら、顔ははいくら膨はれたって、口くちはたしかにきけますから、授業には差さし支つかえませんと答こたえた。校長わらは笑いながら、大分元げんき気ほですねと賞じつめた。実を云うと賞めたんじやあるまい、ひやかしたんだろう。